

## 第2回(2012. 4.15 配信)

### 篠井純四郎の日本史講座－「間違えやすい日本の古い時代の話」

#### 日本の歴史編(2)旧石器時代・新石器時代と青銅器時代・鉄器時代

「旧石器時代」や「新石器時代」の言葉は知っていても、専門家でもない限りこの明確な違いを忘れてしまった人が多いようです。なかには、火成岩や水成岩などのように形成過程の違いとか、あるいは人類の出現過程と同様に、ある時期を境に地球の地殻変動などで形成された石だと思っている、とんでもない人もいます。ましてや「青銅器時代」や「鉄器時代」などは日本史には出てきませんから、この四つの時代と「縄文時代」や「弥生時代」などとの区別することができないのがふつうでしょう。

先史時代区分の一つに、石器時代、青銅器時代、鉄器時代があります。この石器時代は、さらに旧石器時代と新石器時代とに区分されますが、地域によっては石器が多種多様に発展していきますから、この旧石器時代と新石器時代との過渡期を「中石器時代」と呼ぶこともあります。

「旧石器時代」とは、「打製(だせい)石器」と呼ばれる単に石を割っただけの道具を使っていた時代です。日本では「縄文土器」が現れるおよそ1万数千年前までを旧石器時代と呼んでいます。

「新石器時代」とは、割った石を磨いて鋭利にした「磨製(ませい)石器」を使う時代を指します。また、この時代には土器の発明や農耕牧畜という要素が加えられています。

なお、日本では「弥生時代」に青銅器と鉄器とが同時に出現しますから、ヨーロッパのように石器時代、青銅器時代、鉄器時代と明確な時代区分は出来ません。そこで、石器と土器による時代区分がなされて、「旧石器時代」、「縄文時代」、「弥生時代」、「古墳時代」に区分されてきました。

日本人の祖先はアジア大陸から渡ってきた「モンゴロイド」と呼ばれる人種で、最後の氷河期(およそ7万年前から始まって1万年前に終了)では、海面が現在よりも100メートルくらい低かったから、当時の日本海は大きな湖で大陸とは陸続きだったと考えられているので、古代人たちはシベリアからマンモスを追って、樺太経由でやってきたらうし、また朝鮮半島経由で、あるいは中国南部から当時は陸地だった南シナ海、陸続きだった南西諸島から台湾、沖縄経由で渡ってきた、などと諸説があります。これらが日本人の原型だろうといわれており、混血を繰り返して現在に至っているのでしょう。

アジアでは50万年前の北京原人が発見されていますが、わが国で最も古い人骨は「明石原人」(ニッポナントロプス・アカシエンシス)です。昭和6年(1931)4月18日に明石市の西ノ木遺跡から発掘されたこの人間の腰骨は、6~7万年前のものといわれていましたが、残念なことに戦争で焼けてしまい、現在残されている最も古い人骨は、昭和42年(1967)に沖縄県で1万8千年前の地層から発見された「港川人」です。

日本では縄文土器を使う人類が最初であって、それ以前に人間は住んでいなかったというのが常識でしたが、昭和24年(1949)に群馬県の相沢忠洋氏が数個の打製石器を発見したことから、縄文時代以前の日本人の存在が証明されるようになりました。また、長野県の野尻湖では3~5万年前の動物の骨で作った道具が発見されていますし、宮城県では11万年前の地層から石器と共に火を焚いたと思われる痕跡が認められています。現在続々と各地で縄文時代以前の人類の痕跡が発見されています。

しかし、多くの旧石器時代とされている遺跡が平成12年(2000)の「ねつ造事件」で大騒ぎになりました。この事件は、東北のある「石器探し」の人物によって次々と発掘(※1)した旧石器時代の遺物や遺跡が全てねつ造だったという事件で、本業の学者までこの人物を「神の手を持つ人」などと崇拝していた節もあり、日本の旧石器研究の未熟さを露呈した事件でもありました。テレビや新聞などのマスコミ各社は、この人を英雄の様にまつり上げ、大げさに報道しましたが、ねつ造が発覚してからは、あたかもその報復であるかのように批判攻撃しました。

この事件の影響は非常に大きく、ねつ造を疑われた九州のある学者が抗議の自殺をしました。また、諸外国からの信用を落とし日本の名誉が傷つけられました。日本の古代文化は中国や朝鮮半島から伝わったと主張して、何事も日本に負けまいとする中国、韓国、北朝鮮では、「いつも日本はこうして歴史を捻じ曲げているが、その確かな証拠が露見した」と大喜びをしました。そんなに喜ぶのなら、このねつ造者に感謝状の一枚でもやったらどうだろうかと思うのですが、どの国からも何かプレゼントされたという話は伝わってきません。

ところで、日本人の祖先であるモンゴロイドは、ベーリング海峡を渡って北米から南米へ移動し、先住民族を追い払ってチリの先端まで行った痕跡があるという説を発表した学者がいます。つい最近まで先住民族の末裔らしい人がチリの先端に住んでいたといえますから、まんざら架空の物語ではないのかも知れません。私たちは偉大な旅人の子孫です。だから、旅行が好きで、外国のどこへ行っても日本人旅行客をみかけるわけでしょう。

### (※1)発掘調査

私が考古学に興味を持ち、発掘調査に参加していた半世紀くらい前とは、作業がかなり変わってきました。その当時は、国土地理院の決めた緯度・経度・標高を示す三角点や水準点から、ポールや巻き尺を使って発掘現場の位置や標高を割り出したものでした。多くの場合三角点は山の上にあって、岩や木の枝などに皮膚を傷つけられながら何時間もかかって現場まで測量して来たものですが、今は衛星を使って簡単に標高や地点が割り出されます。

また、地中深く眠っている遺跡では、スコップを使って掘った土をリレー方式で遠くに運んだものでしたが、現在ではベルトコンベヤーや小型ブルドーザーが導入されていますから、掘った土を地上に放り投げると力の弱い人は投げた土砂が自分の顔に降ってくるような、そういった力仕事は少なくなりましたので、体力的にも非常に楽になりました。むかしは考古学者は体力勝負でしたが、現在は受験勉強やらパソコンおたくなどで、体力がない青瓢箪のような青年も考古学に打ち込むことが出来る世の中になりました。

遺跡全体の写真撮影は、高い櫓を組んで「はしご乗り」のようなアクロバット撮影をしたり、凧を揚げて撮ったりしたものでしたが、今はラジコンのヘリコプターを使ったりしますから、危険も少なくなりました。他にも、稲科特有の超微細なガラス質は電子顕微鏡を使って調べ、その遺跡での稲作のはじまりがわかりますし、出土品の炭化物から時代を測定する「放射性炭素による年代測定法」や、樹木の年輪から時代や気候などを分析、また土壌の火山灰の分析法や、花粉などから特定する方法、あるいは古代の地震から年代や地層の変化を分析するなど、高度な分析ができるようになりました。

古墳の発掘調査では、小さな穴から医療用のファイバー・スコープによって古墳内部を覗いたり撮影したりすることが出来るようになって、空中の雑菌や埃などによる汚染が最小限に食い止めることが出来ます。以前のように、石室内に巣を作っていたヘビが、石をどかせたら怒って飛び出してきて、驚かされるようなこともなくなりました。

最近見学に行った遺跡では、麦わら帽子に手ぬぐいで頬被りしたおばさんたちが、手にした園芸用のスコップで土をはぎ取っていました。一見すると畑で農作業をしているような格好ですが、今では暇と実益とを兼ねた主婦の立派な職業となっているのです。ほとんどの人は、この作業のベテランになっていると言いますが、その中の一人が、この遺跡や考古学そのものまで丁寧に説明してくれました。

説明がなかなか堂に入っていたものだったから、きっとこの人は広報係の先生なのだろうと思っていましたが、後で現場責任者に聞いてみたら、彼は苦笑いして、「いいえ、どこにも必ずいる世話好きなオバさんの一人ですよ。まあ、門前のオバさん習わぬ考吉学を語る、ですね」と言いました。発掘器財だけでなく、現場の主役も変わってきたようです。

(篠井純四郎)